

『そして世界は「正義」で溢れる』

作者 浅羽 一

『―祖国の為に』

雑踏の中、周囲に満ちるざわめきよりも確かに聞こえるノイズ混じりの音声。それはあたかもこちらの決意を再確認するかのごとく、最早、単なる挨拶にさえ感じられる大義名分を繰り返し、やがて唐突に無機質な電子音へと取って代わられた。私は、二つ折りの携帯電話から電池パックを外し、それらを別々にズボンのポケットにしまった。おそらく二度と、それを使うことはないはずだった。

私は背中に負ったリュックの感触を確かめた。高性能の爆薬が詰まった大量生産の既製品は、とても重たくて、そのくせ肌に中身の角がごつごつと当たって、使い心地は最悪だった。

深呼吸を二度した、肩を動かさず、鼻だけを使って。無言のまま、両手を隠すようにしながら体の前へと持ってきた。

左腕には正確に時を刻む腕時計。：約束の時間まで、後残り二十八分。

右手にはテープで固定された箱。：約束の時間まで、後残り二十七分。

何があっても、どんな衝撃を受けても決して体から離れないように留められた、手の平ですっぽりと覆ってしまえる程度の小さな箱には、ちょうど親指が届く位置にボタンが一つ付いていた。一見しただけでは子供の玩具にさえ劣るだろう、呆気ないほどに簡単な作りだった。事実、それがもたらす結果を考えれば、あまりにも滑稽な姿だ。

だが、喻えそれがどれほど馬鹿馬鹿しくあろうとも、いや、仮にとっても立派なものであったとしても、訪れる未来に差異はない。

私は右手の親指で、リモコンのボタンを強化プラスチック製のカバーの上からそっとなぞった。カバーを開けて、軽くボタンを押し込んでやるだけで、精密に作られたそれは、背中のリュックに十分すぎるまでに詰まった爆薬を起爆させ、私もろとも周囲を、さらには目的となる対象を木っ端微塵に吹き飛ばすだろう。：我らが祖国の為に。

いちいち考えずとも、辺りを満たす濃密な人の気配が、それによる被害が甚大な域に達すると教えてくれていた。

私は右手を握ってパーカのポケットに突っ込むと、左手で目深に被ったフードを調整してから歩き出した。今まで立っていた地下へと続く階段の踊り場は、あつという間に人込みに紛れて見えなくなった。一瞬だけ、地上と地下の丁度真ん中にあるそこが、まるで境界線でもあった風を感じられた。だとすれば、私はもう完全に「あちら側」から「こちら側」へと来てしまったと言うことだ。明るく降り注いでいた日差しは、とっくに届かなくなっていた。

色褪せた赤いリュック、ベージュのパーカーに、僅かに緑がかったジーンズ、履いているのは白いスニーカー。やや俯き加減で背中を丸めて歩く私に、あえて視線を向けてくる者はいない。なぜなら、珍しくも何ともない姿なのだから。

この国の人間は、多くが何処か俯き加減で歩いている。めざましいほどの発展を遂げ、その象徴―或いは証明さながらに乱立する高層ビル群。その腹には、巨大な広告が掲げられ、鮮やかな液晶スクリーンがCMを繰り返している。にもかかわらず、多くの人間は、薄汚れた道のタイルの傷を確かめる風に歩くのだ。それはまるで、「自分は傷ついている」のだと訴えているかのよう。

太陽と別れ、けれどそんな地上並みに明るい地下道を歩いても、やはりそれは同じ

だった。少なくとも、私にはそう感じられていた。

足早に歩くスーツ姿の男が私を追い抜いていき、ふらふらと歩く老人が背後へと消えていく。ばらばらに生まれる足音が、あたかも人間のざわめきに聞こえる。それも、きつと落ち着きのない人間だ。しかし、それでも私は見えない手で耳を塞ぐように歩き続ける。速くもなく、遅くもなく、一定の速度でそこへと向かう。あらかじめ用意してあった切符を使って改札を抜け、脇目もふらず淡々と足を進める。：約束の時間まで、後残り二十三分。

やがて遂に、私は「そこ」へと辿り着いた。

都心部の地下に造られた巨大ターミナル。その一角にあるプラットホームには、もうじき到着する列車を待つて多くの人間が列を作っていた。白色、黒色、はたまた黄色、老人も若者も男に女に特定不可も、様々な人種がごった返す様は、まさに人種のるつぼだ。だとすれば、さしずめ私はそれをさらにかき混ぜる道具だろう。しかも、ぐちゃぐちゃに。何もかもを粉々に砕き、壊し、誰が誰とも、何が何とも分からぬくらいにかき混ぜる。そう、全ては「祖国の為に」。

：馬鹿馬鹿しい。

私は、そんな何よりも自らの思想とはかけ離れた大義名分に、思わず苦笑した。

旧政権が倒れ、「祖国」と呼ぶべき国そのものが崩壊して、早五年。ようやくではあるが、都市部などに置ける貧富の差の拡大も徐々に収まり、国民への食料や職場の供給が追いついてきた。未だに旧体制の下で徹底的に植え付けられた思想が国民の心身に根強く残っている部分はあるものの、それでも現政権が訴える「解放」と「独立」——つまり多くの意味での自由化——は進み、それに伴って社会の在り方も根本から変化した。若い世代の中には、己の能力と努力によって、それまででは考えられないほどの裕福な立場を手に入れる者も確かに現れてきた。

だからこそ、今さらかつての国家体制に戻そうなどと言うのは、最早、時代遅れだと言う他無い。国家そのものが強大で、他の国々に対して多大な権力を持ち得ているのならばまだしも、時代はとつくに変わったのだ。時流に乗り遅れた者達をあつさり置き去りにして。

資本主義国家から入ってきたちっぽけなファストフード店の店先に、何百人という人間が群がって列を成し、小さなバーガー一つを手に入れる為だけに息さえ凍りそうな寒空の下で何時間も待った。バーガーそのものが特別に珍しかったり、はたまたそれほどまでに美味で極上なものであったわけでは、決してない。

理由は簡単だ。「そこに行けば、バーガーが手に入る」。

根本的に弱体化し、なのに気付けば国という身体は軽くなる体重に反比例して己の手の届かない範囲にまで膨れあがり、かといって自分自身を切り落とし行方など許されず、その為にただでさえ不十分な栄養分を無理矢理に広範囲にばらまいた。その結果、街のスーパー・マーケットの食料品コーナーからは品物が姿を消し、食料品を扱っていた小さな商店の主が食料を求めて街をかけずり回る羽目になった。

そんな国が、そんな街が、きわめて大きな変革を経て、ようやくだが、少しずつながらも落ち着いてきた。言い換えれば、まともなものになってきた。

金を払えば、食料が手に入る。金を払えば、暖房器具に燃料を入れられる。金を払えば、

明日を迎えられると信じられる。そう、金さえあれば。今までは、金があっても信じられなかったのに。

だからこそ、だからこそだ。客観的、理性的に考えれば、これで良かったのだと多くの者は言うだろう。安定した生活と安心の未来を持っている国に住む、そんな多くの人間は。一つだけ問題を挙げるとするならば、その「金」そのものを手に入れられる人間が、限られていると言うことだ。

確かに、己の力と環境によって、莫大な富を得ることさえ夢物語にとどまらなくなった。ともすれば一夜にして億万長者になることさえ、子供じみたお伽話とは限らなくなった。

だが、逆に言えば、力無き者は？

か弱き人間、不運な人々、必死にもがけど報われなかった者達はどうだ。

富とは、無限ではない。無限でなく、それどころか現実に限られたものであるからこそ「富」として成立しうるのだ。だとすれば、中にはそれまで同様に、いや、むしろそれまで以上に貧しくなり、いよいよ飢えるしかなかった者が出てきたというのも、必然だった。

急に自分達を新体制に放り出した現政権に対して、「責任を取れ」と訴える声も多い。

しかし、責任の取り方とは、一体どうすることなのだ。国家の予算から金を捻出し、貧しい民の生活を広く保障するのか。裕福な者から財産を没収し、飢えている民の頭上に降り注がせるのか。

：それでは、旧体制に戻ると言うことではないか。そして、それはつまり「もう行き詰まっている」と言うことだ。戻った所で、またあの頃みたいに寒さと飢えに身体だけでなく心までをも凍らせられる日々が再びやってくるだけだ。とは言え、どちらにせよ、金が必要れば今のままでも同じ事だったが。

正直な所、私は現政権になって良かったと思っていた。変動に当たって様々なものが失われ、数々のものが犠牲になった。それはまた現在進行形でも言えることだ。けれど、それでも長い目で見れば、もっと先の未来にまで視野を広げて、国の為を、そこに暮らすだろ人々の為を考えるならば、おそらくこの選択は間違っていないのだと考えていた。格差は生じるだろう。だが、それでも皆が「平等に不幸」で終わるよりはマシのはずだ。

けれど、だとすれば何故、何故、私はいつそ清々しいほどに矛盾を無視して、こんなテロに荷担しているのか。

これもまた理由は明瞭だ。要は金の為だ。要するに、食料を手に入れ、暖房器具に燃料を入れ、明日を迎えられると信じる為だ。私ではない、私にとって大切な人々が。

私は国の未来を案じる前に、自らにとって大切な者達の将来を守らなければならぬ。その為ならば、正論や理性など容易く捨てることさえ厭わない。

最初に「仕事」の存在を教えてくれたのは、故郷の実家、その二軒となりに住む男だった。街よりも、村と呼ぶ方が相応しい小さな田舎の町だ。だから昔から周囲にいる顔ぶれは変わらず、その彼もまた幼い頃から私にとって少し年上の兄代わりだった。そしてまた何より故郷は貧しかった。それだけは、今も昔も変わらずに。

遠く離れた首都や他の都市で起こっている騒動など、まるでいつ壊れてもおかしくなさそうな旧式のテレビの中に映し出されるドラマや映画のごときもの、それだった。少なくとも、私を含めたあの町の人々にとっては、国の行く末よりも遙かに自分達の暮らしの方

が重要であったし、そもそも今日を、明日を生きていかなければ国を憂うことさえ出来なかった。

良く言えば牧歌的で穏やかな田舎町。正しく言えば貧しく落ちぶれた片田舎。見るべき場所もなく、特別な生産性もない、使い捨ての歯車のごとき場所。遅かれ早かれ、あの町は消え去り、いつしか忘れ去られていく定めなのだろう。

けれど、現実にも今尚、あそこで暮らしている者達にとっては、あそこは確かに生活の場なのだ。いや、むしろそんな人々にとっては、あそこそが生きる為の場所なのだ。他の都市や街なんて、知らない人の方が多い。

その仕事があると言うのは、密かに噂されていた事でもあった。だが、現実には私がその存在を、正確には「その存在が事実である」と知ったのは、前述した通り、彼からだつた。

彼は、姿を消す少し前に、私にだけ真実を打ち明けてくれた。都市に仕事を奪われ、私の働き口であった会社が倒産した、二日後の晩だった。

あの夜、仕事を失い、途方に暮れていた私を訪ねてきたのは、身も心も凍りつきそうな寒さなど気にさえしていない、やけに明るい様子の彼だった。

本音を言えば、最初、私は彼に対して憤りを覚えた。それは確かに、自らの不運から来る八つ当たりのな部分もあったであろうが、それでも彼の態度はあまりにも非常識で、何より全てを諦めている風を感じられたからだ。

しかし、そんな彼に対する想いは、ほんの少しの時間が経った後には、まるで正反対のものへと変わっていた。

まずは驚いた。と言うより、信じられなかった。もしくは、信じがたかった。その仕事の実在したという事実には、ではない。このご時世、そんなものがあつた所で不思議でなかったからだ。

最も驚いたのは、その仕事で得られるらしい報酬の額についてだった。あの町で真面目に働いても、それと同額の金を得るには優に数年は掛かるだろう。ましてや、数年間もそこで働ける保証など全くない今にあつては、それはまるでただのお伽話めいていた。

だが、驚きと疑いと、それらを等しく眼差しに込めた私に対して、彼はウォツカで満たしたグラスを片手に、やけに軽い口調で言った。本当なんだよこれが、と。ただ、その眼差しは、本当に痛いくらいに真剣：と言うわけではなく、むしろ悟りきつたような、或いは大切なものを失ってしまった風な、そんな平静と言うよりも虚無感すら漂うものだった。

そして私は知る。自分が彼に最初に抱いた印象は、間違つていなかったのだと。彼は確かに諦めていたのだ。自分自身の命を。けれど、その代わりに彼は絶対に諦めていなかった。大切な人々の命を。彼曰く、種類に応じて金額にも差があるそうだった。

例えば、下級兵士としてとあるテロ行為の作戦に加われれば、幾ら。他にも、パレードの人込みに紛れて対象をナイフで刺せば、幾ら。いっそ、爆弾を積んだ車に乗って指定の場所に突っ込めば、幾ら。技能が必要なものほど、当然ながら金額は高く。危険が大きいものほど、必然ながら金額は高い。

彼が選んだ仕事の代償は、私達みたいな一般の人間が得られる最高額の報酬だった。

私は言った、信用出来るのかと。仮に仕事を果たした所で、そんな連中が本当にちゃんと残された家族へ金を払ってくれるのか。どうせ非合法的な行いなのだ、そのまま無かつた

ことにされてしまわないのか。

彼は言った、「非合法で、許されざる仕事だからこそ、彼らは確かに報酬を払ってくれるんだよ」と。それから「彼らは敵には容赦しないが、『同志』を裏切ることはない」と。そして彼は、自らよりも先に仕事を果たした男の家族の話をした。その家族へは、確かに多大な金額が送られてきたらしい。

私は彼を止めた、言葉では。しかし同時に悟っていた。彼は決して止めないだろうと。なぜなら、私だけでなく、彼もまた行き詰まっていたからだ。彼は、私より二週間も前に職を失っていた。彼の妻は四週間前に子供を産んだばかりだった。

綺麗事を並べるだけならば容易く出来た。残された奥さんはどうするんだ。生まれたばかりの赤ん坊を抱えて、独りで生きる羽目になるんだぞ。それに歴とした犯罪行為だ。未来を待つ子供に「父親はテロリストだ」という重荷を背負わせるのか。もつと探せば、他に働く所が、生きていく術が見つかるんじゃないか。きつと見つかる。だから諦めずに頑張ろう。

：言わなかったし、言えなかった。頑張っただけでどうにかなるくらいなら、必死になって頑張れた。いや、もしかしたらいつかは頑張りの報われる時だって来るのかも知れない。だが、そんな「いつか」が訪れる日まで、己だけでなく、誰よりも愛する人々までもが苦しみ続けなければならぬ。一人で頑張つて済む話なら、きつとまだ救いがあった。

彼は言った。「俺はただ、あいつらには幸せになってもらいたいんだ」。

私はもう彼を止められなかった。金があれば必ずしも幸せだとは言わない。けれど、少しでも生きることに関心出来るのなら、何よりもまずそれこそが幸せになる為に必要なもののだろう。

彼は私に向かって微笑み、その仕事を斡旋してくれるらしい紹介屋の連絡先の書かれたメモを渡すと、最後に「じゃあ、元気でな」と言って帰っていった。およそ一ヶ月後、夫が失踪した彼の妻の下へ、驚くほどの大金が届いたという噂を聞いた。数日後、妻は生まれたばかりの息子を抱いて町を出ていった。

迷っていた時期は、長くなかった。私には妻も子供もいなかったが、年老いた母と二人の妹たちがいて、さらに上の妹は少し前に夫を事故で亡くし、三歳になる息子だけを遺された未亡人になっていた。新しい働き口が見つかる気配は一向になかった。

私は家族に真実を何一つ話さなかった。ただ、「別の町で新しい働き手を募集しているらしい」とだけ告げた。罪を背負うのは、罪を犯す者だけで良かった。頭の中の冷静な部分では、いずれは知られるのに所詮は逃げているだけだと分かっていた。

やると決めてからの日々は早く過ぎた。貰ったメモを頼りに紹介屋に連絡を取り、家を出て、まず指定の場所へと向かった。そこは故郷の町よりもさらに貧しい村で、村そのものが彼らに協力していた。テロリストの中には、私達と同じ人種だけでなく、肌の色の濃い人間も幾人か見受けられた。

私は、そこで私と同じく自身を売った者達と一緒にあって、テロリストから種々の訓練を受けた。格闘術や、銃の撃ち方、爆弾の使い方、さらにはそんな攻撃的なもの以外にも、むしろそれら以上に厳しく、武器の仕組みや、様々な地域の地理・歴史、それから何よりも言語を学ばせられた。ただ、私のように使い捨ての人間は、ある程度の所で訓練は終了した。私達に最も必要だったのは、知識や能力よりも、覚悟と度胸だった。そして私達は

もうすでに覚悟を決めた者ばかりだった。少なくとも私は、今さら洗脳を受け直す必要などなかった。

やがて遂に私の「仕事」の決行日が決定した。

内容は、密かに進められている某資本主義大国との軍事・対テロ同盟の締結を前に、現政権からその国へと秘密裏に派遣されている視察団の暗殺。厳密には、有事の際に狙われやすい場所などを視察して回っている彼らを、その目的箇所の一つである鉄道ターミナルに、特急列車の一部を貸し切った専用列車によって到着した所を狙って、周囲もろとも爆破すると言うものだった。甚大なる被害と、何よりもテロによる視察団の全滅という成果を持って、彼らに自分達の行為の愚かさや無謀さを知らしめる事が目的だ。

計画の概要を与えられた時、私は心の中で苦笑した。テロが存在し、そのテロを撲滅しようとする動きがあり、それを牽制する為にまたテロが行われる。最低最悪の悪循環。半永久的に稼働し続ける悲劇の大量生産機。けれど、そんな理屈を知った上で、私はその作業に当事者として参加した。

僅かも心が痛まなかったと言え、嘘になる。だが、それでも私にとっては、名前も知らぬ他人よりも、遙かに家族の方が大切だった。罪も、悪も、間違いも、私を責める言葉としては価値があろうとも、私を止める言葉としては物足りなかった。

そして今、約束された列車の到着時間まで、後残り十八分。多少の緊張こそあったものの、焦燥はなく、興奮さえなく、また恐怖もなかった。これから殺すというのに、これから死ぬというのに、私の中にあっただのは妙に冷めた思考と、何やら奇妙な安心感だった。

これで、みんなもしばらくは楽に暮らせるだろう。

身勝手な自己満足だと言われれば、そうだろう。独善的な愚行だと弾劾されても、否定出来ない。それでも、心は確かに静かだった。きっと、あの夜の彼もまた、同じような気持ちだったのだろうと、何となくだけど理解した。約束の時間まで、後残り十七分。と、その時だった。

不意に、足に妙な感触が生まれた。そして反射的に見下ろした私は――

――絶句した。いつの間にか、私のズボンの端を一人の幼い男の子が掴んでいた。突発的かつ不可解な事態に、ましてや自身の置かれた状況も相まって、瞬間的にパニックに陥りそうになる。だが、直後に男の子の顔に生まれたものを見て……

……ああ、迷子か。唐突にそう理解した。

見た感じ五歳くらいだろうか。男の子は、泣いていないものの、今にもその大きな両目から大粒の涙をこぼしそうで。私の足に、かすかに震える体温が伝わってきた。

(……どうする)

パニックを辛うじて回避した私であったが、それでもすぐに決断を下すことは出来なかった。幼子は切なげほど真っ直ぐに、フードの下に隠れた私の両目を見つめてきていた。(……仕方ない。少し、場所を移すか)

下手に泣かれて騒がれても問題がある。かといって、こんな子供に構っていらられる暇もない。私は男の子にまるで気付いていない風を装って、そのままその場を立ち去ろうとした……が。

「ねえ」

まるでそんなこちらの思惑を悟ったかのごとく、私の足が動く寸前、子供が声を発してきた。その声は気丈にも、かすかに震えてはいたけれど淀みなく聞こえた。

「ママが、いなくなつたんだ」

幼い子供に特有の少し甲高い声音。空いているもう一方の手には、不安を代弁するように、しっかりとビニール製の人形が一体、握りしめられていた。この国で流行っている、子供向け特撮番組に登場するヒーローの人形だった。

私は、やはり去ろうとした。ほんの僅かに、先ほどまで感じていたものよりも強い痛みが心を走ったが、それでも歩みを止めるまでには至らなかつた。：約束の時間まで、後残り十五分。

「待ってよ」

しかし、直後、私の足は強制的に停止させられた、その子供が発した言葉によつて。「僕、知つてるんだ」。

反射的に、左手がパーカの下に潜めた硬い感触を確かめた。「こちら側」において、「それが子供である」と言う事など何の救いにも誤魔化しにもならない。焦りそうになる感情を押し殺し、さり気なく周囲へ視線を走らせた。脇の下に、嫌な汗が浮かぶ。

だが、続けて発せられた彼の言葉は、そんな私の思考をさらに飛び越えたものだった。

「おじさん、ヒーローでしょ」

思わず声が漏れた。何を言われたのか、まるで理解出来なかつた。それでも彼は、真つ直ぐにこちらを見上げていた。「大丈夫。僕、絶対に誰にも言わないから」。そして彼は、心から真剣に話をしていると言つた表情のまま、懸命に言葉を紡いできた。

「お願い。ママを見つけて欲しいんだ。きつと、僕がいなくなつて困つてると思うから。泣いてるかも知れないし。パパの代わりに、僕がママを守らないと駄目なんだ」

状況も忘れて、やけに外見に似合わない話し方をする子供だと思つた。良く言えば賢いのだろうが、悪く言えば妙に大人びていて小賢しい。

けれど、その眼差しは真剣で。私は何故だか、泣きそうだった彼の涙の理由が、実は「自分が迷子になつたから」ではなく、「母親を一人にしてしまつたから」である気がした。相手はまだまだ幼くて、しかも現に迷子になっているのだろうし、そんな思考は本当に場違いで馬鹿馬鹿しいと思えたけれど。それでも、それ以上に、子供には不釣り合いなほどに、必死で独りぼっちの不安と恐怖を隠して言葉を紡ぐ様子が、彼の言葉に真実味を与えていた。：約束の時間まで、後残り十四分。

「だから、ねえ、お願い。ママを見つけて」

それは無視して去る方が面倒な展開になると考えただけなのかも知れないし、それとも単純にこう言つた方が手っ取り早いと計算しただけなのかも知れないが、同時にもしかしたらほんの少しばかり、彼のその態度に対してまともに相手をしてやろうと思つたのかも知れなかつた。勿論、母親探しに付き合つてやるつもりや時間はなかつたけれど。

「ごめんね。おじさんは、今、忙しいんだ。だからね、ママは駅員さんに見つけてもらいなさい。ほら、あっちの方に制服を着た男の人が歩いているだろう」

私は子供の視線の高さに合わせる為に腰をかがめ、離れた場所にいた駅員らしき人物を指さした。何となく、妹に代わつて甥をあやしていた時を思い出しながら。：約束の時間まで、後残り十三分。

「嫌だ」。彼の答は明確だった。そして二、三度、強く頭かぶりを振った。

私はそれに苛立つよりも、何故だか奇妙な既視感を覚えた。それはもしかしたら、頭の何処かではもうすでに、この幼子がきつとそう応えるのだろうと予想していたから、なのかも知れなかった。彼は、やはり私のズボンの裾を強く握ったままだった。

「駄目だよ。だって、早くママを見つけないと駄目なんだから。早くしないと、ママ、僕までいなくなっちゃったって思っただけ泣いちゃうかも知れないから。だって、パパがいなくなつた時も、ママは凄く凄く泣いたんだ」

拙い口調で、それでも気丈な声音で、幼子は傍にいない母親を心配して話し続ける。彼と、その母親、父親の間に、何があり、またどんな結果が訪れたのか、そんな事は知らないし、そもそも混乱した幼子が自身でも理解せぬまま適当な言葉を並べ立てているだけなのかも知れない。

けれど、その真実がいずれにせよ。眼前の幼子の眼差しは真っ直ぐだったし、その小さな手と指に込められた力は強かった。迷子だろうと言う以外、事情など何一つ知り得ない私にも、ただ、そんな姿だけは知る事が出来ていた。

周囲の人間達は、数えるのも馬鹿らしくなるほど沢山いるにも関わらず、誰一人として私に：と言うよりも、その幼子に話し掛けてくる者はいなかった。無論、今は彼の傍に私がいるから、彼が迷子であるのだと思いついていないだけなのかも知れない。しかし、それでも幼子が母親とはぐれ、私のズボンの裾を握る、その瞬間まで、つまりはこの広いプラットホームで小さな男の子がたった一人で歩いていた、その間、きつと進んで彼に手を差し伸べた者は皆無だったのだろう。

：一体、それはいかほどの恐怖か。

それなのに、彼は未だに涙をこぼしていなかった。瞳には、今にも溢れ出しそうなほどに涙をにじませていたけれど。それでも、その頬に切ない跡は見られなかった。

「ねえ、だからお願い。変身して見せてなんて、言わないから。だから、ほんのちよつとだけ力を使つて、ママを見つけて」

子供は再びその単語を口にした。「ヒーローなら、簡単でしょ」。

それは疑問形でなく、むしろ確認めいた断定形。同時に、大きくうねる波間の中で、それでも必死で沈むまいと小さな浮き輪にしがみついているかのような、おそらくはきつと彼にとって己を保つ最後の希望。

理由など知るはずがないし、もしかしたらそもそもそんなものが実在するのかわかきえ定かでない。たまたま、テレビの画面に映っていたヒーローの「変身前」の姿が、今の私の格好に似ていたのかも知れないし、もしかしたら目深に被ったフードのせいで「素顔を隠しているのはヒーローだからなんだ」と勘違いされただけなのかも知れない。はたまた、掴む為のズボンを着ている人間ならば誰だって良かったのかも。だが…。

「お願いだよ。お願いだから」

「……………」

無意味だと、下らない妄想だと、一笑に付す事など私には出来なかった。なぜなら、それをしてしまえば、それは同時に私自身の愚行も唯一にして絶対の意義を失ってしまうからだ。どれほど馬鹿げていると思えるものだって、それが、その人間が最後の最後に本気で懸けてみようと思つた事を、その想いを、それ以外の人間が笑って良いはずがない。否

定しても良いし、断罪するのも構わない、身勝手な理屈だと責められても仕方ない。けれど、嘲笑う事だけは、許せない。

(…私が、ヒーロー?)

小さな手に握られた人形を見る。そこには紛れもない「正義の味方」がいた。

パーカの中の感触を確かめる。そこには間違いない「正義の証明」があった。

『我らが祖国の為に』

そして私は同志の言葉を思い出し、心の中で頬を歪めた。

それこそ下らない妄想だ。何が正義か。そんなもの、道端に落ちているコインよろしく、弄び放り投げる者が異なるだけで、容易く表にも裏にも日に当たる面が変わるものなのに。

現に、同志達に言わせれば、彼らは確かに「正義の味方」だろう。なぜなら、彼らは――少なくとも幹部連中は――心から自らが正しい行いをしてると信じて疑わない。実際には、目的の相手を殺す為だけに、幾人もの無関係の人間を巻き込んで爆破する、まさしく悪の組織……いや、きつと子供向けの番組では悪の組織ですらやろうとしない悲劇を起こす存在なのに。

…と、そこで私は唐突に気付いた。このままでは、この眼前に立つ幼子は、間違いなくその短い生涯に幕を下ろす事になると。それも、きつと最悪と言つていいだろう結末の一つを迎える形で。

そう思つた瞬間だった。私の中に、それまでに感じた事もないほどの強烈な罪悪感が芽生えた。

こんな話、もうとつくに理解して、覚悟していたはずなのに。事実、つい先ほどまでは見知らぬ人間達が木っ端微塵に吹き飛ばぶ様を脳裏に浮かべても、それこそ無関係な老人や子供が何人死のうとも、心に多少の痛みこそ走れど、心乱れる事など無かつたのに。だけど、そう。私はもう、この幼子を知つてしまった。…約束の時間まで、後残り十分つ。

私は急いで思考した。今さら計画を中止する事など出来ない。ましてや、子供一人の命惜しさに逃げ出す事など決して許されない。それはつまり、彼らを裏切る行為だから。

裏切るわけにはいかない。彼らは敵に容赦なく、同志には寛容で、そして裏切り者を決して許さない。それはまた、裏切り者の家族すらも。裏切りの血族を、彼らは絶対に見逃さない。他の人間に対する見せしめの意味も込めて、やはりそれも「最悪だ」と簡単に頷けるだろう方法をもって、確実に処刑する。だから、もうすでに「こちら側」へと足を踏み入れてしまった私には、最早、選択の余地などない。それに、そもそも、これを成し遂げなければ、私の家族はいずれにせよ路頭に迷う事となる。仮に、気持ちの上で同志を裏切る事が出来ようと、気持ちの上だからこそ愛する家族を裏切り見捨てる選択など出来るはずがなかった。

しかし、彼だけでなく、きつと母親もまとめて一緒にあの世に行けるだろうから寂しくないはずだなんて、そんな現実逃避は何の救いにもなりはしない。そもそも私も自らの命を懸けていて、それどころかリモコンのボタンを押せば、他の誰よりも早く一番最初に吹き飛ばのだから、その大罪を軽減する為の言い訳にならないどころか、そんな事を口にする事自体がきつと新たな罪悪だ。祖国の為に必要な犠牲も、正義の為に必要な行為も、本音を言つてしまえば、所詮は持たざる者達の、持てる者達に対する暗い嫉妬が姿を変えただけのものしか思えない。…少なくとも、今この瞬間、幼い自身の事以上に愛する母

親を想っている子供に、そんな理不尽な怒りを向けられて良い罪も責任も存在しない。「その国に生まれた事こそが罪なのだ」などという言葉は、単なる詭弁に過ぎない。だって、そんな屁理屈が正しいのなら、私も、私の家族も、あの国に生まれたというだけで、全てを受け入れて大人しく諦めるしかないのだから。そんな事、納得出来るはずがない。なぜなら私は、また家族は、今もまだ国など関係なく、確かにこの世界で生きているのだから。そして、つまりそれは、この幼子にとっても同じなのだ。

「どうしたの」

相手の動揺を敏感に悟ったのか、彼の声にかすかな震えが重なった。だから私は、一切の負の感情を無理矢理に抑え込むと…。

「大丈夫」

躊躇うことなくフードを払って、素顔を晒し、穏やかに微笑みながら言った。「何も心配しなくていい。きつと、君を助けて上げるから」。

それは間違いなく、彼が望んでいるものとは違う未来。なぜなら、私には彼らを裏切る事も、家族を見捨てる事も、出来はしない。ただ、同時に、今となってはもう一つ、背負いたいと思えるものが増えただけだ。

けれど幼子は、そんなこちらの言葉を、やはり少しだけ違う風に捉えたのだろう。一転して明るい表情を顔に浮かべ、「本当？」と声を上げた。何故だろう、そんな彼の嬉しそうな様子に、私の方まで仄かに嬉しくなった。いや、と言うよりも、僅かに気持ちが悪くなくなった。まさか、こんな行為だけで己の大罪を償えるなどとは決して思っていなかったはずなのに。

しかしいずれにせよ、今度の私は、確かに先ほどよりもっと自然に笑えて言えた。

「良いかい、ちゃんと聞くんだよ」

「うん」

「ほら、見てごらん。ここは色んな人が多すぎて、誰が誰だか分かりにくいだろう」

「…うん。だから、ママも見つからない」

「だからね。私が今からテレパシーを使って君のママに君の事を教えるから、君は、ママが見つけやすい場所に行っていなきやならないんだ」

一言一言、ゆっくりと噛んで含めるように幼子に話す。彼は、たった一音ですら聞き漏らすまいとするかのごとく、大きな瞳を開いたままでコクコクと頷く。

「君は、一人で行かないと駄目なんだ。私は、超能力を使っている間は、動けなくなってしまう。だから、君は一人で歩いて行かないといけないんだ。…恐いかい？」

私の言葉に、幼子は一瞬だけ不安そうに表情を曇らせるも。

「大丈夫。僕、男だから」。すぐに、真剣な眼差しをしながらそう応えた。

「そうか。うん、強い子だ」

それは紛れもなく本心だった。だから、本当に勝手な話だろうけれど、大丈夫だと思っただ。いや、そう期待した。彼ならきつと、自分が生きている意味を見失わないでいてくれるだろうと。例え、どれだけ辛い事があつたとしても、きつと。

…恨むのならば、この世界ではなく、私の事を恨んでくれ。

「じゃあ、その道で行くんだよ」

「うん。ここをずーっと真っ直ぐ行って、階段を一番上まで上がるんだよね」

「そうだ。そうしたら、広い所に出られるから。良いかい、ママは、その一番隅の方にいるからね。そこでじっと待っているんだよ」

「うん」

「とても遠いけど。一人で、行けるかい」。私の言葉に、彼は…。

「うん。僕、やるっ」

子供ながらに、或いは子供だからこそ、その決意の眼差しは揺るぎなく純粹だった。だから、再び大丈夫だと思った。いや、信じた。…違う、やはりそうじゃない。私は、願ったのだ。彼が、救われるようにと。

(…大丈夫さ、きっと)

腕の時計を見る。約束の時間まで後残り五分。大丈夫、きつと間に合うはずだ。幼い子供の足では託せる期待も多くはないけれど、それでも、きつと彼が爆発で吹き飛ばされる事はないだろう。その後のパニックも、あれだけ広い場所の隅にいれば、何とか巻き込まれずに済むかも知れない。無傷で助かる可能性は低いかも知れないが、それでも、粉々になつて死ぬよりは遙かにマシだろう。

そして私は、思わず深い息を吐きかけて…その時だった。

「え。そんな、遅れるって…」

不意に近くから聞こえてきた声に、私は意識のほんの一部を引き寄せられた。

「ただでさえ時間ぎりぎりなのに…待ってるこっちの身にもなれよ。お前を迎えに、わざわざ駅の中にまで…」

どうやら、携帯電話の向こうの相手と何やら口論をしているらしい若い男。さして興味深いものでなければ、そもそもこんな状況でいちいち気にいられる相手でもない…はずだった、次の言葉を聞くまでは。

「え。電車が止まったって、何でだよ」

今にも幼子を送りだそうとしていた私の意識の、全てが、その男達の会話に染められた。「知らないって、そんな。…ちつ、とにかくホームで待ってるからな。着いたら急いで」再び意識が私の中へと戻ってきた頃にはもう、心の中は激しくざわめいていた。確認はない。確認のしようもない。だが、何故だろう、妙に確信めいた思いが鼓動の速さを増していた。

「…おじさん？」

急に様子が変わった私に何かを感じたのか、幼子は不安そうだった。けれど、私はそれを無視して周囲に意識を向け―。

唐突に視界の端に、幾人かの私服の男達を捉えた。

確認はない。確認のしようもない。ただ、確信めいた直感が告げていた。

計画が、発覚したのだ。

「…早く行くんだ」

「え、でも…」

とにかくこの子だけでも逃がさなければ。私は沸き上がる焦燥を必死に抑えて、一刻も早く彼を遠ざけようとした。左手はもう、パーカの下で拳銃を握っていた。

「良いから、早く―」

そこまで言った時だった。私は、私服の男達が完全にこちらへと向かって進んでくるの

を見た。

先頭にいた男と目が合った。フードを被っている暇さえ無かった。

男達が一気に拳銃を握って走りだす。

私も銃を抜いて彼らへと向けた。しかし…。

「早く、早く行かないかっ」

突然の私の行動に驚いたのか、それとも剣幕に怯んだだけか。状況を理解も出来ぬまま、幼子は急速に近付きつつある男達と私の間で硬直したように動かなかった。互いの銃口から伸びる直線が、小さな身体の中で交差した。

私は咄嗟に彼を突き飛ばそうと、右手を上げて―。

「リモコンを持っているぞっ」

「使わせるなっ」

瞬間、男達が激声を響かせながら銃を構えた。：躊躇う様子は、微塵もなかった。

「くそっ…」

最悪を悟った私は、とにかく幼子から少しでも距離を置こうとした。どうせ、もう目的の列車はやって来ないのだ。だとすれば、後は少しでも多くの敵を道連れに自爆するだけだ。そう、この幼子さえ傍にしなければっ。

そこで私は勢いよく地面を蹴って―。

「逃がすかっ」

………やけに大きな音、音、音。

と言うよりも、それ以外の音が全て消え失せてしまったと表現する方が正しいのか。焼け付いたように網膜で揺れる光の痕の向こう側で、やけにゆっくりと世界が反転するのを見た。私の左手から銃が飛んでいく。

痛みはなかった。ただ衝撃だけがあった。けれど、ほんの刹那の後、そんなものよりも遙かに強く、激しく、私は意識を根底から震わされた。

騒然となり離れていく人々。勢いよく突進してくる男達。しかし、そんなものよりかはつきりと、私の目は、こちらから少し離れた場所でうつぶせに倒れている幼い子供の姿を捉えた。

視界の端で舞っていた赤い飛沫は、果たしてどちらのものだったのか。

深紅に染まったシャツから伸びる、とても艶やかな褐色の四肢。かすかにさえ動かない小さな手には、もうヒーローの人形は握られていなかった。

不意に、美しい色だと思った。その幼子の肌の色も、その肌の下からこぼれた血の色も。その証拠に、黒と紅がやけに鮮明に網膜を焦がした。

私の全てが黒く、そして紅く染まった。

「はは…」

立ち上がるどころか、腕を持ち上げる事さえ出来なくなった私は、自然と笑った。なるほど、これが彼らにとつての「正義」なのか。

最早、私は死人同然だった。むしろ、とつくに死んでいない事実には違和感を抱いた。けれど、なればこそ私には確かにまだ結末を迎えるまでに幾ばくかの時が残されていた。

私は、妙にゆっくりとした流れの中にいた。

思えば、世界を恨んだ事は一度も無かった。境遇を嘆いた経験は多々あるし、奇蹟を願

った記憶も数え切れないだろう。幸福を羨み、幸運を妬み、いつ現れるかも分からない不幸と不運に戦々恐々とした日々を送っていた時もあった。けれど、世界を憎んだ事は一度も無かった。

良くも悪くも、私の想いの向けられる範囲は狭かった。それは自分と、家族と、自分にとつて大切だと思える数少ない友人達、そしてそれらを取り巻く環境。つまりは、私が生まれ育った田舎町の中だけで揃え集められる程度の物事だ。恨むとか、恨まないとか、憎むとか、憎まないとか、そんな感情以前に、そもそもそれ以上に広大なものに對して本心から何かを思っている余裕が無かった。真剣に何かを考えられるほど深い知識もほとんどなかった。

本当に、いつもいつも毎日を生きていく事に追われていた気がする。またそうやって辛うじてでも日々を過ごしていければ、それだけでとりあえずは安堵していた。満足では決してない、安堵だ。世界を呪う前に、もつと身近な現実で手一杯だった。

だから、世界の片隅に置き忘れられたかのごとき町で生きていた私にとって、遠く離れた、それこそ「世界」の出来事など、それが良いものであれ悪いものであれ、正直な話どうだって構わなかった。つまり、世界を求めた事が一度も無かった。

閉じた左右の瞼の裏に、家族の笑顔と泣き顔がそれぞれ浮かんで消えた。

(同志達よ：)

少年の手からヒーローは飛んだ。私の左手からも銃は飛んだ。だけど、私の右手には確かにそれが残っていた。だから、今の私に最後に出来る事はたった一つだけだった。同時に、今の私が最期にやりたいと願えた事もたった一つだけだった。立ち上がるどころか、腕を持ち上げる事すら出来なくなっていた私だが、それでも己の意思で出来る事が、たった一つだけ残されていた。ならば、もうそれだけで十分だった。

きっと私はこの場に来て初めて、彼らの真の同志になっていた。

(ようやく、私にも分かった：)

躊躇わなかった。むしろ自ら望んでいた。奴らがどれだけ急ごうとも、しかしたったそれだけの事しか出来ない私の方が、少しだけ早かった。

(：これが、世界を憎むと言う事か)

最後に残された一切を使って、右手の親指をかすかに動かしてボタンを押した。想像していたよりも遙かにボタンは軽かった。

やがて私は全てを使い果たして早々に消えていく。きっと、おそらくほんの刹那だけ存在しただろう死に顔は、醜く笑っていた事だろう。

結末など、知った事では無かった。

〈了〉